

審査結果の要旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

学位論文は、日本を代表する篆刻家である山田寒山・正平の父子を取り上げ、総合的・実証的研究を行ったものである。30年にわたる研究の成果を集大成したものであり、関連の先行研究も少ない中で、新出の資料や関連の文献を駆使し、併せて関係者から取材した貴重な証言をもとに論を展開しており、近代篆刻史に寒山・正平という代表的な篆刻家を位置づける上で、大きな意義を有している。学位論文は、山田寒山・正平父子の二人を文人と捉え、詩・書・画を中心とする篆刻と関連が深い事績からも考察を行い、独創性のある論を構築している。特に第一章の「篆刻の美と表現」に関する研究は、学位論文の中心をなすものであり、印面と印影を対照させながら分析するなど、その手法は独創性がありこれまでに無い水準に至っている。記述の中に、筆者の印象論が散見し、篆刻史において、山田寒山・正平が、これまでの表現をどう受け止め、そこに如何なる価値を付け加え、次代へ影響を与えたのかという論述がやや十分でないが、研究の意義や独創性があり高く評価できるものである。

また、第四章では、大学書道教育や高等学校芸術科書道における教育面からの研究が展開されており、山田正平の東京学芸大学での篆刻講義を、一次資料である『篆刻講義ノート』や当時、実際に講義を受けた学生への幅広いインタビュー調査を行い、考察を加えている。教育的な業績を残している篆刻家は少なく、教育面から山田正平を捉えた点には独創性がある。全体の論の展開において、この章の位置づけがやや明確でない点が指摘できるが、その内容は、大学や高等学校芸術科書道における篆刻の指導の工夫・改善に寄与する内容となっている。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

長年にわたる研究の集大成として、新出の資料、美術館等へのフィールドワーク、インタビュー調査等を行い、全体的な研究方法は妥当であると言える。また、全章を通して、網羅的な研究が展開されており、レファレンスの価値が極めて高い。第三章の山田正平年譜については、多くの資料を駆使し、これまでにない画期的な水準に至っている。また、篆刻が他の芸術、歴史、文化の一翼を担っており、美術史、歴史考古学、文化史等に裨益する研究となっていることは指摘できる。一方、山田寒山・正平を客観的に篆刻の歴史の中に位置づける点については今後の深化が求められ、日本及び中国の篆刻史全体を俯瞰した研究を今後も継続し、研究のさらなる発展を期待したい。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

これまでの研究の集大成であり、研究資料、データの収集は、画期的な水準に至っている。山田寒山・正平を文人として捉え、収集の対象は事績の他に、篆刻にとどまらず詩・書・画に及んでいる。新出資料の発見、フィールドワークによる収集など、その分量と質は、これまでにない優れたものとなっており、その分析と考察が詳細に行われている。山田正平については、その教育者としての側面を一次資料やインタビューを基礎資料として分析を試みている。また、第三章及び第五章では、山田寒山・正平と周辺の文人との交友を詳細に分析しており、多角的な視点から

の論の展開となっている。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

これまでの 30 年以上の研究を整理し，筆者独自の視点で再構成し，山田寒山・正平の篆刻の美と表現を中心に論を展開しようと試みており，各章のなかには資料分析による体系化など，優れた内容が見られる。筆者のこれまでに発表した論文に，美と表現に関する研究を加え，全体を俯瞰しながら再構築したものであり，論理的な展開と言う点では若干の課題は残る。しかしながら，山田寒山・正平の実証的・総合的研究としては，その篆刻の美と表現についての詳細な研究が展開され，その考察と結論は妥当であると判断でき，本研究領域の学術的水準に十分に達していると言える。

各章の研究と考察の手法は，概ね妥当であると考えられ，第一章では，印面と印影を比較して，立体的視点から詳細な分析を行っており，筆者が篆刻や書の表現者であることから，造形的な視点にとどまらず，刻印の過程にも考察が及んでおり，その手法は，今後の篆刻家の研究に一定程度の示唆を与えるものとなっている。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

提出論文は，長年にわたる研究の集大成として評価でき，レファレンスの価値が高く，収集した資料，多角的な視点からの考察は高く評価できる。既発表の論文等に新たな内容加えて再構築しており，実証的・総合的研究として評価できる。特に，山田寒山・正平の篆刻作品の美と表現を独自の手法で詳細に分析し，篆刻史に位置付けようと試みており，その分析手法も含めて意義のある研究となっている。また，山田正平については教育者としての側面から，一次資料である『篆刻講義ノート』等の分析や文献資料やインタビュー調査等による考察を行い，総合的研究としての提出論文の価値を高めている。

以上の通り，令和 3 年 2 月 9 日に開催された公開論文発表会後の審査委員会において，申請者の提出論文は，審査員五名の合議により，本研究科の博士（学術）の学位を授与するにふさわしいことを判断した。